いのちと地域を守る

1944年12月7日――M7.9東南海地震

巨大津波 街をのみ込む

紀伊半島沖を震源に1944年12月7日、マグニチュード7・9の東南海地震が発生した。震度6（当時の基準）を記録し、巨大津波も起きた。気象庁によると愛知、三重、静岡の各県を中心に、死者・行方不明者は1200人以上を数えた。第2次世界大戦中だったため、詳しい被害状況は公表されず、「隠された地震」と言われる。

震源に近い三重県尾鷲市は、高さ10㍍ほどの津波に襲われた。日本歴史災害事典によると、市内の犠牲者は96人に上る。むすび塾に参加した川原町自治会長の山西敏徳さん（80）は、惨禍の生き証人だ。

発生は午後1時36分。小学6年だった山西さんは、小学校の校庭で騎馬戦をしていた。突然、地響きとともに地面が大きく揺れた。家に帰ろうと校門に近づいたとき、近所の女性の叫び声が響いた。

「津波が来るぞー」

学校裏の中村山へ一目散に走った。急斜面に密集するシダをかき分けながら、一直線にはい上がる。頂上から見下ろすと津波はあっという間に海沿いの街をのみ込んだ。

地震から津波が到達するまで10～15分ほど。「本当に早かった」と山西さんは振り返る。津波は内陸200㍍まで押し寄せ、打ち上げられた漁船が家々を破壊した。

自宅では両親が命を落とした。「津波の時は潮が引くという言い伝えがあった。父が潮が引かない海を見て『津波はきやへん』と、自宅に残ってしまったんや」

6日後の13日、尾鷲の空にごう音が響いた。米軍の爆撃機B29が19機、南から北へ、飛行機雲を残しながら飛行するのが見えた。「名古屋大空襲」が本格化したのは、その日の夜だ。

東南海地震は戦時下に起きたため、士気の低下を懸念した軍によって情報が統制され、被災状況は正確に伝えられなかった。被災記録もほとんど残されていない。

「当時を知る人は随分減った。だからこそ伝える必要がある」。山西さんは東日本大震災を機に、伝承の大切さをあらためて感じている。

1944年の東南海地震で尾鷲市は大きな被害を受けた（提供尾鷲市、撮影太田金典氏）

減災・復興支援機構理事長 木村　拓郎さん

「多重避難」地域で対策を

南海トラフ巨大地震は、東日本大震災よりも津波到達までの時間が短い。要援護者の避難は難しくなるが、諦めてはいけない。震災後「多重防御」が提唱されている。防潮堤やかさ上げ道路の整備と、高台移転などを組み合わせる考え方だ。地域には行動の「多重避難対策」を勧めたい。

まず車避難。原則的に徒歩避難と定めた上で、要援護者専用の車を決めておく。渋滞の回避と迅速な避難が両立できる。

要援護者は車いすを使えば動ける人、全く身体の自由が利かない人など、個々の事情が異なる。前もって地域で把握する必要がある。

避難の動きだしを早くするため、笛やハンドマイクを使いながら先導する。逃げながら災害情報を収集できるように、首から下げられるラジオもあるといい。

逃げ遅れた場合を想定し、各家庭で救命胴衣になるクッションやリュックサックを用意する。地域で申し合わせて、表札の代わりに船舶用の浮輪に名前を書き、家々に飾ってはどうか。いざという時に役立つだけでなく、街並みもユニークになる。

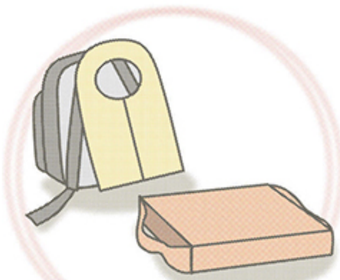
避難は一刻を争う。屋外脱出の妨げにならないよう耐震補強や家具の転倒防止も不可欠だ。

多重避難対策

逃げ遅れた時のために

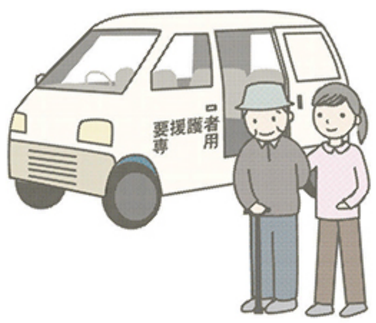
●万が一津波に流された時のために、船舶用の浮き輪を表札に使う

●救命胴衣になるリュックやクッションを用意する



速やかな避難のために

●要援護者避難専用の車を決める



●避難誘導用に笛、ハンドマイク、首から下げられるラジオを準備する

Miyo

東日本大震災の教訓を生かすため、河北新報社は地域住民らと一緒に地震・津波に備える巡回ワークショップ「むすび塾」を開いています。名称には、地域と人、人と人のつながりを強め、防災・減災に結び付けていきたいとの思いを込めました。

東北に加え、全国の巨大地震が心配される地域でも開催し、将来の災害に備えを促します。

■むすび塾に参加して――三重・尾鷲市川原町自治会

【心配なこと】自宅は築45年。地震の揺れ対策としては、家具の転倒防止しかやっていない。近くに高いビルや避難タワーがあると助かるのだが。
＝主婦・塩谷美保さん（75）

【心配なこと】避難場所の公園までの間には逃げ込める建物はあるが、高齢者が公園にたどり着くには時間がかかる。
＝新川原町自治会長・湯浅規生さん（71）

【参加して】地域で避難訓練に取り組んでいるが、地震の時はやはり、みんなで高台に早く逃げないといけないと再認識した。
＝主婦・岩崎早甫さん（70）

【参加して】親戚が宮城県七ケ浜町にいる。今回の議論を通じて防災意識は高まった。自治会の集まりで、あらためて備えを話し合いたい。
＝知古町自治会長・塚原有己さん（65）

【日ごろの備え】大きな地震が起きた場合、夫とはお互いを捜さずに、ばらばらに逃げようと話し合っている。山に逃げる途中にある橋が落ちないかどうか心配だ。
＝主婦・中村映子さん（74）